

# 暴力の百年

ホセ・ソルス

. はじめに	
1 . 暴力の世紀を後にして -----	3
2 . 21世紀は平和の世紀? -----	4
3 . 暴力とは何か -----	5
. 暴力に至る道	
1 . 世界の拡大とアイデンティティの危機 -----	6
2 . 所有物と結びつくアイデンティティ -----	7
3 . 生存のための闘い -----	8
. 生物学と歴史	
1 . 攻撃性と暴力性 -----	9
2 . 暴力の歴史的連鎖 -----	9
. 今日の暴力の特徴	
1 . 緩慢な死 -----	11
2 . ナショナリズムと帝国主義 -----	12
3 . 多様な世界は不可能か? -----	13
4 . お前は仲間ではない -----	14
5 . 家庭と学校の暴力 -----	14
6 . 死を招く宗教 -----	16
7 . 分裂症的な民主主義 -----	16
8 . 民族抹殺 -----	17
. 終わりに - 今日見過ごせば、明日は戦争 -----	18
注 -----	19

2002年に生まれた  
私の娘、イネスに。  
彼女がこれから生きる世界が  
より平和で、自由で、公正であるように。

著者のホセ・ソルス(Jose Sols)は神学者・歴史学者。バルセロナのラモン・ルリ大学の Institut Quimic de Sarria で、倫理学・キリスト教思想の教授を務めている。彼はまた、「キリスト教と正義」研究センターのメンバーで、ローマ・クラブのスペインの章の共同執筆者でもある。パリとバルセロナの刑務所でも教えている。josesols@iqs.es

< 原版編集 >

**CRISTIANISME I JUSTICIA**

**R. de Lluria, 13, E-08010 Barcelona, Spain**

**tel:(34)93 317 23 38 fax:(34)93 317 10 94**

**e-mail:espinal@redstb.es**

**http://www.fespinal.com**

< 日本版翻訳 >

**イエズス会社会司牧センター**

**〒162 - 0054 東京都新宿区河田町7 - 14**

**電話 03 - 3359 - 7655**

**FAX.03 - 3358 - 6233**

**e-mail:pyopyo@m78.com**

**http://www.kiwi-us.com/ selasj/**

## はじめに

私が生まれたのは1962年、聖ヨゼフの日の早朝だった。ソリア(スペイン)の厳しい冬も終わり、ドゥエロ川にはやさしい春がやってこようとしていた。私の誕生は、どこの家庭でもそうだろうが、家族に大きな興奮をもたらした。私は、カスティジャなまりのスペイン語を話す、バレンシア人の家庭で育った。家族はカトリックで、西洋人で、白人で、教養があって、経済的にも豊かだった。そして私は、昔も今も、一人の男だ。

私が1才の誕生日を迎える前に、私たち一家はカタロニア地方のバルセロナに移った。そこには新たな世界が開けていた。バルセロナは二つの文化(カタロニアとスペイン)を持つ大都市で、民主主義とカタロニア民族主義が熱くぶつかり合っていた。

私はどちらも選ばなかったが、私の人生は今日までずっと、それらの影響を受けてきた。それは死ぬまで変わらないだろう。

### 1. 暴力の世紀を後にして

その同じ年、世界各地で何万という赤ん坊が生まれ、人類に仲間入りした。異なる国籍、文化、人種、宗教、経済状況のもとで。そして、今も生きていれば、彼らは私と同じ年だが、彼らの人生もまた、自分で選んだのではない周囲の現実から影響を受けてきた。確かに私たちは、人生という劇場で見えざる手に操られる、ただの操り人形ではない。だからといって、自由の翼をはためかせて、好きな文化を選んで生きることができるわけでもない。

このように、私と同時期に生まれた何万という人、少し時間の枠を広げれば何百万という人は、みな異なるグループ、時には対立するグループに属している。その中には、他のグループに不信感を持つ人もいるだろう。もし、私が一人でイスラムの国を訪れたら、町中を一人で歩いていて、迷子の西洋人に見られはしないかと、落ち着かない気分だろう。同様に今日、ヨーロッパの町を多くのイスラム教徒が歩いているが、彼らもその町の住人であるのに、やはり被害妄想的な気分を感じるだろうし、それは自然なことだろう。パレスチナ人とイスラエル人、チェチェン人とロシア人、アフガンの諸部族については言わずもがなだ。彼らは今も互いにさげすみ合い、殺し合っている。

私たちは暴力に満ちた世界に生まれ、暴力に満ちた世界を創ってきた。そして私たちは、暴力に満

ちた世界を、子孫への遺産としてのこしている。

どうして？ この疑問は、長いこと私をとらえて放さなかった。考えつきたいいくつかの答えは単純明快なものだったが、満足のいくものではなく、考え続けるうちに次第に複雑で曖昧になってきた。そして今、私は他の人と同じく、無知の闇にとらわれている。世界はどうしてこんなに暴力的なのか。その訳を私は知らないし、理解できないし、また理解したくもない。ジョン・キーンが言うように、「(暴力の問題を)理論化しようというどんな試みも、自己満足のレトリックに陥っているように見える」。私が「理解したくない」と言うのは、暴力の仕組みを理解することが、暴力の犠牲者への敬意を欠いているように思われるからだ。つまり、暴力を「説明する」ことができるという言い方は、まるで料理の作り方について話しているように聞こえるのだ。だが、その一方で、私は暴力がどこから来るのか考察し、探求しなければならぬと感じている。私たちみんながいつか、他人とも自分自身とも平和に生きていける日が来ると、希望(幻想)を抱いているのだ。この「みんな」とは文字通り「みんな」のことだ。誰一人排除しない。

20世紀は、人類史上もっとも暴力的な世紀だった。1945年8月、広島と長崎を破壊し尽くした原爆のような圧倒的な爆弾を、人類はかつて持ったことがなかった。世界70カ国以上に埋められている、1

億1千万個もの対人地雷ほど残酷な爆弾を、人類は持ったことがない。その中には、石やチョウのようにカモフラージュされたものさえあるのだ。これらの地雷は、世界で一日に27人を殺し、40人に一生残る障害を与え、戦争が終わってから何十年経っても爆発する力を持ち続け、友だちとサッカーに興じていた罪もない子どもの人生を破壊する。ナチスの収容所のように組織化された死の工場も、史上かつてなかった。20世紀にカンボジアやソ連、ルワンダで行われたほど大規模な虐殺は、かつてなかった。

20世紀の暴力の特徴は、被害者の数の多さ(世界人口はこの1世紀で4倍になったのだから、当然かもしれない)や、ハイテク兵器の登場だけではない。暴力の種類も増え、より洗練されてきた。たとえば、ラテンアメリカの独裁政権で用いられた心理的拷問は、イスラエルから教わったもので、対象の人格すら変えてしまう力があつたし(たとえばスペイン人のイエズス会員、ルイス・エドゥアルド・ペジェセルが、1981年にガテマラで受けた拷問)、ドイツのナチス収容所で、医師が収容者に行った「科学実験」もそうだった。そればかりか、暴力は社会のあらゆる側面に浸透し、家庭にまで(男性による女性への暴力や、暴力的なTV番組として)入り込んでいるのだ。若者が暴力を娯楽と見なすことを許すばかりか、積極的にそうし向ける社会に、どんな未来があるだろう？

私たちは素朴にも、世界は二つに分かれていると信じていた。一方では人々は平和に暮らし、もう一方では暴力と混沌が支配していると。だが、そんな考えはずいぶん前から現実的ではなくなっている。平和そうな国に暮らすどんな市民の戸口にも、暴力は忍び寄る。1986年に暗殺されたオロフ・パールメ(スウェーデン首相)や、エルネスト・ジュック(カタロニア人の経済学者、スペインの元閣僚で、2001年にETA<バスク祖国と自由>によって殺害された)に起こったのも、まさにそうだ。兵器産業や麻薬貿易、国境を越えた人間の絶え間ない移動は、暴力が一地域に限定されることなく、全世界に不平等な仕方で広がっていくことを意味している。

20世紀に起こった何千という暴力の例を、振り返る必要があるだろうか？ 1912~13年にオスマン帝国が崩壊したとき、それまで何世紀にも渡って、トルコがセルビアやギリシャ、ブルガリア、ルーマニアを抑圧してきた反動として、バルカン半島に住むトルコ人が追放され、虐殺されたこと。アナトリア平原に住むアルメニア人キリスト教徒が、トルコ人によって虐殺され、特に19世紀の最後の数年には25万人ものアルメニア人が殺されたこと。1917年の、ブルガリア人によるセルビア人の大規模な殺害。あるいは、スターリンによって処刑された、何百万ものソ連市民(ウクライナだけで1400万人といわれる)。1937年の、日本軍による中国人の虐殺(炭疽菌やチフス菌のような生物・化学兵器を使って、あるいは単純な武器によって、1937年12月3日には、人口65万の南京市だけでも26~35万人の民間人が殺されたといわれる)。ナチス収容所で行われた処刑と、長期に渡る非人間的扱い。第二次大戦中、各都市への爆撃が引き起こした、膨大な人命と文化遺産の損失。カンボジア、ポル・ポト政権による大虐殺(200万人とも言われる)。アメリカが支援するラテン・アメリカ各国の軍事政権による弾圧(ガテマラでは20万人、エル・サルバドルでは7万人、アルゼンチンとチリでは、米国の「コンドル作戦」によって何万という人が殺されたり失踪したが、そうした作戦の舞台裏には、ノーベル平和賞受賞者、ヘンリー・キッシンジャーらが直接関わっていたという)。アルジェリア戦争。ベトナム戦争。トルコとイラクのクルド人虐殺。東ティモールでは、イギリス、米国、オーストラリアの承認の下、1975年にインドネシアが侵攻して以来、人口の1/3が殺されたという。アフリカのグレート・レイク地方では1994年に、ツチ人とフツ人の紛争が激化し、100万人もの犠牲者が出た。1990年代の、セルビア人によるボスニアでの「民族浄化」。民族主義的テロリストや宗教的原理主義者によるテロ(アルジェリアだけで、市民の犠牲者は10万人を超える)。あるいは、麻薬カルテルの私兵やマフィアなどなど…。私たちはこうした事件を、わざわざ思い出すまでもなく知っている。今世紀、私たちは過去のどんな時代よりも

大規模な暴力を目撃してきたのだ。

## 2. 21世紀は平和の世紀？

米国で2001年9月11日に起こった、イスラム原理主義者によるテロ(9.11)と、その後、米国がはじめた「国際テロに対する」戦争、その他メディアをにぎわせるさまざまな大事件は、21世紀も暴力の暗雲に覆われていることを示している。もし、暴力が悲惨な20世紀に封じ込められていたら、暴力に関心を持つのは歴史学者だけだったろう。だが、残念なことに暴力は、10年前、20年前と同様、今日も存在し続けている。暴力が起こる場所やタイプは変わってきただろうが、世界は今も血塗られている。暴力に満ちた過去とは永久に決別したはずなのに、今なお新たな暴力を目撃している国々が多くある。

本書の執筆中に、ブッシュ大統領が米国議会に大幅な予算増額を承認するよう説得していたが、この増額分は軍備の改善と軍の強化にあてられる。米国は世界の兵器生産額の1/4を占め、世界最強の軍隊を保有し続けることを目指しているのだ。そうした兵器が使われずに済むことは、滅多にない。湾岸戦争のような大規模な戦争で使うチャンスがなければ、地域紛争で使うまでだ。私たちは、史上もっとも暴力的な21世紀の種をまいているのだ。

暴力という現象が、若い人々に広まっているという現実(ブラジル、リベリア、シエラレオネ、スーダン、ルワンダ、ボスニアなどでは、いわゆる少年兵士さえ見られる)、始まったばかりの21世紀の行く末に不安をなげかけている。ルワンダー国だけで、1994年のフツ人によるツチ人虐殺の後、12万人の子どもが収監されたが、そのうち2400人は虐殺行為に加担した罪で、大人用の刑務所に収監され、劣悪な環境でやせ衰えている。

## 3. 暴力とは何か？

私たちが「暴力」という言葉で了解している事柄を、改めて明確にしておくことは、適切だろう<注1>。ジョン・キーンは、次のような伝統的な定義を示している。「暴力とは、ある個人や集団が他の人の身体

に、同意を得ることなく、衝撃を与えたり、打ち傷や切り傷、こぶをつくり、頭に痛みを与え、骨を折り、心臓に衝撃を与え、手足を失わせ、ひどいときには死に至らしめる行為のことだ」

これとは対照的に、ヨハン・ガルトゥングやイグナシオ・エリャクリアらは、暴力を単なる肉体的攻撃や瞬間的な行動に限定せず、ある人の肉体的・精神的平穩を意図的に侵害するあらゆる行為、人間の生命一般に対するあらゆる攻撃を含むものと、広く解釈している。たとえば、ある経済体制が構造的な原因から経済的な貧困を生み出すのも、暴力と考えられる。エリャクリアは、1973年の著書で、構造的暴力(根元的で目に見えない暴力)と、革命的暴力(目に見える暴力で、構造的暴力が招いた結果である)について、こう書いている。「私たちは2種類の暴力について語っている。一つは根元的で表面化せず、社会的不正という背景から理解される、構造的暴力である。もう一つは、人間の尊厳を踏みじり、自由を抑圧する暴力的な状況に対抗する、革命的暴力である」

これは同時に、1968年にコロンビアのメデジンで開催された、第2回ラテン・アメリカ司教会議の見方でもある。会議は、ラテン・アメリカ大陸の状況を預言的に見直し、「制度化された暴力」であると語った<注2>。

ヨハン・ガルトゥングは暴力の概念を、肉体的攻撃という枠よりも拡大すべきだと主張する。彼はこう述べている。

「暴力はここでは、潜在的な可能性と現実との落差、あり得たはずのものと現にあるものの落差の原因として定義される」。「もし、ある人が18世紀に結核で死んだら、それは暴力とはいえない。なぜなら、それは避けられない死だからである。だが、もし今日、結核の治療法が存在するのに、ある人が結核で死んだら、私たちが言うところの暴力が、そこに存在する...換言すれば、潜在的な可能性が現実を上回っていれば、その落差は避けられるはずのものであり、落差が避けられるはずのものならば、暴力がそこに存在する」。今日の世界で起きている病気や飢餓による死の多くは、経済資源を有効に活用

すれば防止できた(これが、ガルトゥングの言う「潜在的可能性」だ)。だが、そうする力があつたにもかかわらず、実際にはできなかつた(これが「現実」だ)。これもまた、暴力と見なすべき事態だ。

このように、キーンの見方と同様、ガルトゥングやエリャクリア、メデジンのラテン・アメリカ司教会議の見方も、暴力の核心的な特徴を示している。暴力とは、特定の肉体的暴力に留まるものではない。それは、人間の生命や身体的平穩に対するあらゆる攻撃を含むもので、キーンのいう肉体的暴力と、ガルトゥングやエリャクリア、メデジン会議がいう社会

経済構造の暴力の両方を含む。

暴力は、個人生活から政治に至る、人間生活のあらゆるレベルで感じられる実存的なフラストレーションの表現である。自分自身の現実と、本来あるべき自分との落差が自己嫌悪を生む。この自己嫌悪が、落差を生むもの、落差を思い知らせるあらゆるものを、暴力的に拒絶させるのだ。暴力と不満はよいパートナーだ。暴力はフラストレーションと失望の一表現だ。私が破壊するのは、私自身が破壊されたと感じるからなのだ。「私が落ちこぼれるなら、他の人も道連れにしてやる」

## ．暴力に至る道

---

人間には、暴力に至るさまざまな道がある。ここでは、三つの道について見てみたい。はじめの二つはアイデンティティに関わる問題であり、最後の一つは生きるための闘いに関する問題である。

### 1. 世界の拡大とアイデンティティの危機

政治の変化によって社会空間が短期間に広がることは、過去何度もあつた。たとえば、ギリシャのポリス(都市国家)はアレクサンダーのヘレニズム帝国へと発展したし、最近では、ヨーロッパの国民国家はEU(ヨーロッパ連合)のメンバーとなつた。こうした社会領域の広がり、個人や集団のアイデンティティに問題を引き起こす。「私は誰?」「私たちは誰?」私は自分の町にいて、とても落ち着く。私には名前があり、隣人のことも知っている。私は誰かの息子であり、誰かのいとこである。みな同じ言葉話し、同じ信仰を持ち、同じ価値観を共有している。だが、社会領域が広がるとき、私は名無しの人となる。私は巨大なコミュニティのメンバーとなるが、そのコミュニティでは誰も私のことを知らず、私も誰のことも知らない。人々は異なる社会背景を持ち、違う言葉話し、宗教さえも違う。その時、私は迷子のような気分になり、私を支えてくれるしっかりしたもの、アイデンティティにすがりつかずにはいられなくなる。そして私は、ある国籍や宗教、イデオロギー集団に属すること、どこかのサッカー・チ

ームを応援することに決める。迷子のような感覚に対処するための、こうした防衛的な態度は、私の世界を小さくする。そう、いまや私の世界は小さくなり、一つのグループとなつた。そのメンバーは「仲間」で、そうでない人は「他者」だ。自分の属する集団を小さくしようという、こうした試みは、欺まんに満ちている。個人は一つの集団だけに属しているわけではなく、人類全体にも属しているからだ。だが、迷子のような感覚があまりに強くなってきたため、私たちは何かの集団、国、民族に所属せずにはいられない。私たちは何者かにならなければ、生きていけないのだ。

このような社会的調和の破綻は、個人のアイデンティティを、仮想された集団的アイデンティティへと向かわせる。「私はカタロニア人だ」「バスクの生まれだ」「社会主義者だ」「スクォッター(不法居住者)だ」。所属する集団の存続こそが、私にとっての根本問題となつた。なぜなら、その集団こそ私の人生であり、私の存在そのものだからだ。私は言葉で、素手で、武器を持って、その集団を守り始める。なぜなら、私の命はその集団のものだからだ。少なく

とも、その集団こそ私が(誤解かもしれないが)信じているものだ。私の所属する集団を攻撃する者は、私の命を攻撃しているのだ。その集団こそ私にアイデンティティを与え、私が存在することを許しているからだ。世界は今や、二つに引き裂かれている。「仲間」と「他者」だ。私は、「仲間」の生存のために闘い、「他者」を全滅させるよう命じられていると感じる。「他者」の存在自体が、私と仲間にとって脅威なのだ。こうして暴力が舞台に登場する。臆病で気の小さい人、「教養ある」人は、言葉の暴力を用いたり、「政治的に正しい」振る舞いや態度で、他人を笑いものにする。一方、年若くて自制心に乏しい子どもたちは、直接に肉体的暴力を振るう。

20世紀、世界は大きく成長した。人口が急増し、都市は人口過密になった。他方、農村は世界中で過疎化している。もし異星人が地球を訪ねたら、空いてる土地がいくらかでもあるのに、なぜ人類が大都市で押し合いへし合いしながら暮らしているのか、理解できないだろう。世界と都市の人口過剰は、人々の社会的地平を広げ、都市の文化的多様性を増大させた。私は毎日、街角に出るたびに、西ヨーロッパ人、スラブ人、南部アフリカ人、北部アフリカ人、アンデス地方の南アメリカ人、北アメリカ人、パキスタン人に出会う。私はどこにいるのか？ 世界中のどの大都市でも同じことだ。

## 2. 所有物と結びつくアイデンティティ

暴力へと導くもう一つの道、「他者性」の破壊へと導く道がある。それもまた、アイデンティティと関係がある。つまり、最善をつくして自分の所有物を守ろうとする態度だ。前項で取り上げたのが、社会的地平をローカルな集団へと縮めることだとすれば、この項で取り上げるのは、自己を所有物へと重ねあわせようという態度だ。つまり、「私が何者かは、私の所有するもので決まる」ということだ。だから、私の所有物が危険にさらされれば、私のアイデンティティも脅かされる。所有物と結びついたアイデンティティの例は、昔から数多くある。たとえば、地主は小作人より「偉い」。地主はより多くの財産を持

っているからだ。銀行家はパン屋より「偉い」。なぜなら、銀行家の方がたくさん金を持っているからだ。大臣は公務員より「偉い」。なぜなら、大臣の方が、権力も社会的影響力も、金もたくさん持っているからだ。こうした例はどれも個人の場合にすぎない。本人が死んでしまえば、墓石には名前と生年月日、死亡年月日が刻まれるだけだ。同じ人間なのに、たくさん持っているか、少ししか持っていないかによって、生活も行動もさまざまだ。私たちは人を、持ち物によってしか見ていない。つまり、自分の所有物が危なくなったと感じた時、生命の危機、実存的危機を感じるのだ。誰かが私の車を、職場を、家を、銀行口座を、遺産を攻撃したら、私は素手で、あるいは何でもいいから手にとって、自分でそれを守らるだろう。所有物を失うことは私自身を失うことだからだ。私とは、私の所有物だ。私とは私の家であり、車であり、給料であり、銀行口座であり、遺産である。ここで再び、暴力が登場する。私を攻撃する者は、あるいは私の所有物を攻撃する者は、誰であれ攻撃してやる。

これはひどい考え方だ。人間性は破壊され、所有物の合計、銀行の預金残高にまでおとしめられている。人間の複雑さ、豊かさは、決定的に貧しくされている。預金残高が増えるに従って、新たな世界が開け、私は新しい者、より偉大な者となれる、というのだ。ある日、大臣が私の職場を訪ねてきたらどうするか、物乞いの少女が訪ねてきたらどう扱うか、考えてみるがいい。本来、ある人が他の人より価値があると証明するのは不可能だ。人間であること、それ自体より大切なことがあると証明することは不可能だ。にもかかわらず、残念ながら大臣と物乞い少女の扱いは正反対なのだ。

20世紀に入って、消費主義が生まれた。今や私たちは、生きていくために必要なものだけでなく、宣伝によって不可欠だと思われている余計なものまで買っている。第一次産業革命は、土地とビジネス両面で資本が蓄積されて、豊かになった社会が必要とする商品のストックを、巨大な規模で生産するために始められた。だが、それに続く工業化の時代は、必需品の生産ではなく、むしろ、「ある商

品を消費することは必要なことであり、その商品はすぐに供給されなければならない」ということを、社会に信じさせようとした。こうした消費主義は、「生活の質」(車を持てば、冷蔵庫やテレビ、セントラルヒーティング、エアコン、ビデオ、コンピュータ、別荘を持てば、もっと幸せになれる)とか、「人並みの暮らし」といった言葉を使ってきた。だが、たとえば、現代の東京の平均的市民が、江戸時代の人々より幸せかどうかは、確かでない。消費主義は人々の心に、所有への強迫観念を増大させ、自分の所有物によってアイデンティティを確立する傾向を増大させた。こうした傾向は特に、20世紀に入って顕著になり、それに伴って暴力も顕著になった。

### 3. 生存のための闘い

三番目の、そして最後の暴力に至る道を考えよう。それは、人が生きる上で欠くことのできない基本的欲求の否定だ。ここでは、基本的欲求を、以下の七つの欲求の総体と定義したい。食糧、住まい、衣服、健康、文化、自由、平和だ。これらやつの中心的な理念によって、人間生活は尊厳を保つことができる。マズローの「欲求のピラミッド」を用いて、そのことを説明したい。そこには、以下のような欲求の諸段階がある。

#### **自己実現の欲求**

(自己充足)

#### **自己評価の欲求**

(自己価値、成功、名誉)

#### **社会的受容の欲求**

(愛着、愛情、帰属意識、友情)

#### **安全の欲求**

(安全の確保、害悪からの保護)

#### **身体的欲求**

(食糧、水、空気)

エイブラハム・H・マズロー - は、ロシア生まれの米国人行動心理学者だが、人間の欲求は段階的に上昇するという説を展開した。つまり、低次の、より

基本的な欲求が満たされると、人はより高次の欲求を満たそうとする。20世紀を通して、人類の大部分は、生きていく上で不可欠な、もっとも基本的な欲求、つまり、生存のために必要な基本条件さえ満たされてこなかった。20世紀、世界は飢餓、迫害、拷問、殺害に満ちていた。生存に不可欠な、もっとも基本的な欲求を、日常的に平和的な手段で満たすことができないとき、私たちはそれを暴力的な方法で満たそうとする。これが基本的欲求を満たそうとする闘い、生存のための闘いだ。私たちの国が飢餓に襲われて、食糧が配布されているとしよう。食糧は全員に行き渡るだけ十分あるから、列に並ぶようにと言われている。私たちは辛抱強く行列に並ぶ(それは第三世界では日常的な風景だ)。だが、もし食糧が十分でなく、配給の順番も決まっておらず、押しの強い人だけが食糧を手にするとしたら、どうだろう。あつという間に暴力沙汰が起きるだろう。押し合いへし合いしながら進み、自分と家族の食物を得ようとするだろう。私たちがこんなにも貧しい一方で、膨大な食糧を抱えている人を目にしたら、暴力はいっそうすさまじいものとなる。

バランスを回復したいという欲求は当然だ。不公平な状態は、公平を回復したいという暴力的な衝動を生み出す。壁で隔てられた二つの部屋の、一方には水が満たされ、もう一方はカラだとしよう。壁に亀裂が入った瞬間から、水は一方からもう一方へとこぼれだし、両方の部屋の水位が同じになるまで続く。基本的な物資が公平に分配されていない社会では、物資を持たない人々は、暴力に訴えてでも、持ちすぎている人から奪うだろう。

こうして、極端な貧困と人口過剰はしばしば、暴力を呼ぶ。暴力が起きる地域は、農村や人口密度の低い高級住宅街ではなく、大都市の貧困に苦しむ地域であることが多い。私たち人間もまた動物であり、生きるためには空気と水、食糧、住まいが必要なことを忘れてはならない。もし、それらの欲求を否定されたら、闘ってでもそれを満たそうとする。ナチス・ドイツの歴史は、そのもっともよい例だ。ヨーロッパでもっとも文化的な国の一つであり、近代哲学と地理学の祖国、偉大な音楽とすばらしいオーケ



ストラの母国であったドイツが、想像しうる最悪の暴力、ユダヤ人虐殺工場へと変貌した原因は、第二次大戦後の巨額な賠償金負担、世界恐慌、ロシア革命による共産化の恐怖から生じた、「大衆的な不満」だったのだ。

## ．生物学と歴史

---

暴力には重要な動物的特徴が含まれている。人間は攻撃的な動物種に属している。「攻撃的」は「暴力的」とは同じではないが、日常会話では、両者はしばしば混同される。攻撃性は多くの動物種の特徴であり、それによって個体もしくは集団が、生命や繁栄を脅かす外部環境から身を守ることができる。ライオンはシマウマを食べるために狩る。この攻撃性がなければ、ライオンは100万年前に滅びていただろう。雌ライオンは、子どもを外敵の襲来から守る。このように、食糧と保護のニーズは攻撃性につながっている。人間もこうした動物種の一員だ。もし疑うなら、街角で母親の腕から赤ん坊を奪ってみるといい。2秒もしないうちに、おとなしい女性がどのように野生動物に変貌するか、思い知るだろう。

### 1. 攻撃性と暴力性

だが、攻撃性は暴力と同じではない。暴力が起きるとすれば、その背景に、暴力の発生源としての攻撃性がありうる。だが、この背景としての攻撃性は、暴力という現象の原因ではなく、暴力を可能にするものと言った方がよい。動物学者のコンラート・ローレンツによれば、攻撃性は動物の特徴であり、それによって種の存続が図られる。ある動物種が生息地を広げるにつれて、ライバルとの間に、自分たちの子どもを守り、自然な攻撃衝動にはけ口を与える闘いが生じ、この闘いによって自然淘汰が起こる。この理由から、ローレンツは人間も共有する動物的攻撃性を、「邪悪なもの」とは考えなかった。種内部の攻撃性は「あらゆる生物の体系と生命を保つ営みの一部である」。「だが、まさに攻撃衝動は、本来は種を保つれっきとした本能であるからこそ危険きわまりないのである。つまり本能というものは自発的なものだからだ」  
<注3>

このように攻撃性は、性欲や食欲、恐怖と同様、私たちのもっとも根元的な一部分だ。だが、暴力は違う。暴力は外から来る。少なくとも、そ

う感じられる。エリヤクリアはこのように言っている。「生存に不可欠で、概して有益な衝動は、ずっと残すべきである。それが有害なものになりうる場合は、何か特別な抑制メカニズムによって抑止される」

### 2. 暴力の歴史的連鎖

ところが、人間生活における技術の漸進的発展は、エリヤクリアが言う「抑制メカニズム」を減少させてきた。つまり、攻撃者(たとえば、他国への攻撃を指示する大統領や、はるか上空から発射ボタンを押す爆撃機のパイロット)と、犠牲者(爆撃を受ける住民)との間にコミュニケーションがないことが、攻撃に対する抑制を弱めているのだ。ホセ・マリア・バサベはこう指摘している。「技術の進歩によって殺人が簡単になったため、心に傷を負うことなく人を殺すことが次第に容易になり、武器の射程距離が長くなったこともあって、殺害者が自分の罪の結果に鈍感になっている。こうして殺害者は、自分の行為に恐れを抱かなくなっている」

政治学の父トーマス・ホッブスによれば、この特

別な抑制メカニズムこそ、近代国家の土台である。この近代国家には、一つの法体系が築き上げられ、「コモンウェルス」と呼ばれる。その目的は、おのおのが「他者」の攻撃の脅威から守られていると感じることである。この「他者」とは、人々にとって「オオカミ」のような存在なのだ（「ホモ・ホミニルプス」＝「人は人にとってオオカミである」）

ホブズの議論は、万人の本質的平等という理念に基づいており、人は他者と同じレベル（自然状態）を獲得したいと望むが、それは人々の間に対立をもたらす。「自然は、人間を、身心の諸能力においてねつぎのように不平等につくった。すなわち、あきらかに他人よりも肉体的につよく、あるいは精神が敏活な人が、しばしばあるとしても、しかもなお、すべてをいっしょにしてかんがえると、人と人との差違は、ある人がそれにもとづいて、かれのものとして要求しうる利益（ベニフィット）はどんなものでも、他人がかれと同様に主張してはならぬというほど、大きくはないのである。すなわち、肉体のつよさについていえば、もっともよわい者でも、ひそかなたくらみにより、あるいは彼自身とおなじ危険にさらされている者との共謀によって、もっともつよい者を殺すだけのつよさを、有するのである」<注4>

「自然状態」においては、万人が万人にとって潜在的な敵となる。なぜなら、私たちはみな、同じ事柄を欲しているからだ。「コモンウェルス」とは、社会の全構成員が法体系によってお互いから守られるよう、社会の統治を特定の権威に委ねる目的で、万人が署名する信約の産物なのだ。政治とは自然的なものではなく、人間が社会で生き延びるためにつくった人工的な産物だ。「人々（かれらは生まれつき、自由と、他人にたいする支配とを愛する）が、かれらじしんにたいするあの抑制（そこにおいてわれわれは、かれらが諸コモンウェルスのなかに住んでいるのをみるのだが）を導入するさいの、かれらの窮極の原因、目的、あるいは企図は、かれらじしんの維持についての、そして、そのことによるもと満足な生活についての、洞察である」<注5>。ホブズは、人

間が本質において暴力的だと言っているのではなく、むしろ、人間が社会の一員であるからこそ、生存のために他の人々と闘わなければならないと言っているのだ。

だが、もし暴力が私たちの一部でないなら、そして、私たちが持ち合わせているのが、生存のために必要な攻撃性だけだとすれば、私たちはどうして暴力的になるのだろうか？ 私たちはどうして、「他者」を殺したり、本物の「死の工場」をつくってしまったりするのだろうか？

この根本的な問いに答えるために、私たちは人類学的な神話を検証しなければならない。ルネ・ジラルドは、「和解のための犠牲者」あるいは「スケープゴート」について、こう述べている。ヒトは学習過程において、模倣的な行動、他者の真似が多くなる。この模倣によって、同じ集団に属するメンバー同士の競争が増加する。複数の男性が同じ女性を求めたり、複数の個人が同じものをほしがったり、同じ分野を支配したがりつづけるのだ。やがて、すべての人が同じものをほしがる時が来る。これが「模倣の危機」で、それ以前に存在していた基本的な社会構造を失わせる。この危機は、万人の万人に対する戦争へと導き、ついにはその集団を自己破壊させるか、さもなければ「和解のための犠牲者」を登場させる。「和解のための犠牲者」とは、何かの理由から、ある集団のメンバー全員が突然、集団の一人に暴力を集中させることをいう。こうして、集団の中でふくれあがった暴力への願望は、満たされる。犠牲者の死は集団に平和をもたらす。犠牲者は平和のシンボルとなり、聖なるトーテムとなる。宗教はまさにこうして、平和の希求から生まれる。社会は犠牲者を前にして一致団結する。宗教や社会組織、文化、道徳は、こうして社会に現れる。誰であれ集団内で暴力を始めた者は追放され、そうした禁止事項から道徳的価値が生まれる。

福音記者ヨハネはこのことを、大祭司カイアフアの口から言わせた。「一人の人間が民の代わりに死に、国民全体が減びないで済む方が、あなたがたに好都合だとは考えないのか」（ヨハネ11、

50)。ジラールによれば、カイアファは、万人の願いを代弁したにすぎない。つまり、「もっとも重要な者への暴力は制限するが、より大きな暴力を避けるために、必要なら、最後の手段として重要人物を犠牲にする」のだ。

カインとアベルの話(創世記、4章)も、暴力の起源を説明する。カインは弟を殺して唯一の権威者、神との仲介者になろうとした。この話によれば、暴力は自己主張を目的として生まれ、他者の存在を排除する。同様にヘーゲルも、主人と奴隷のたとえを用いて語っているが、ここでは触れない。

にもかかわらず、私たちはいつ、どのようにして、歴史に暴力が登場したのか、学問的に知ることはできない。

必要な情報が足りないからだ。だが、少なくとも暴力をふるった人は、暴力を自分の内的要素とは感じず、後天的なもの、かつて自分たちにふ

るわれた暴力への報復だと考えていたことは、容易に想像できる。「私が暴力をふるうのは、かつて私や私の家族が同じ目にあったからだ」。この言葉は、刑務所でよく聞かれる。犯罪者はふつう、自分の暴力を正当化する言い訳として、「私が暮らしていた環境には、生きる手段や幸せになる方法がなかった」という。戦争で過酷な戦闘へと突き進む人は、家族や友人を亡くしてしまった人であることが多い。

こうした訳で、生物学と歴史は共に、暴力のルーツを示す。暴力は、このように生物学と歴史の二重の要素を考慮に入れなければ、理解できない。

## ・今日の暴力の特徴

---

20世紀を通じて、暴力は人類のあらゆる側面に浸透し、無邪気を装って、子ども向けの娯楽にまで進出した。人類には、血塗られていない部分など何一つなくなったように見える。確かに、私たちの歴史的記憶と人類学的直観が教えるかぎりでは、暴力はつねに存在していた。だが、この百年というものの暴力は増大し、より洗練され、「効率的」に(加害者にリスクが少なく、殺される人の数は多く)なった。逆説的だが、暴力は民主主義や人権ときわめて幸福に共存し、いまや何編かの書類よりも軽いもののように見える。

### 1. 緩慢な死

20世紀最大の暴力は、社会経済的不正である。この暴力は、緩慢な死を招くもので、希望をまったく残さずに、多くの人々の命を奪う。それは社会構造の一部なのだ。20世紀を通じて世界規模のシステムが作られ、よりグローバルな世界が出現したが、そこでは少数の人がますます豊かになる一方、多数の人々はますます深刻な貧困に陥っている。国連開発計画(UNDP)の『人間開発報告2001』によれば、世界人口60億人のうち46億人が発展途上国に住んでいる。そのうち28億人が一日2ドル

以下で生活し、12億人は一日1ドル以下で暮らしている。8億5400万人が読み書きできず、3億2500万人の子どもが小中学校に通っていない。9億6800万人がきれいな水を得ることができず、24億人がもっとも基本的な衛生手段を利用できない。毎年1100万人の5歳以下の子どもが、予防可能な原因で死亡しており、一日あたり3万人になる<注6>。UNDPはすでに1998年の『人間開発報告』で、90年代はじめと比べて、豊かな国々と貧しい国々との所得格差は、32倍から70倍へと拡大した、と述べている。

これらの数字は、巨大な不正の存在を示している。彼らは自分でそうなった訳ではなく、貧しく、あるいは金持ちに生まれついたのだ。もちろん、中には努力して金持ちになった人もいるが、それにしてもある文化や社会、経済の下に生まれたからこそ、自由に才能を開花させることができたのだ。今日の膨大な貧しい人は、貧しい環境に生まれついており、隠された才能を発揮することは決してない。社会が機会を与えないからだ。貧しい生まれの金持ちサッカー選手(たとえばマラドーナ)のような例外もあるが、たいてい大衆の不満をなだめるために利用される。20世紀に入って、欧米諸国が経済成長の危機を乗り切るために、世界に押しつけた経済システムは、防護マスクを持たない貧しい人々をじわじわ殺す有毒ガスのようなものだ。しかも、その害は、すでに見てきたような別な種類の暴力、つまり生存のための深刻な暴力を引き起こすのだ。

## 2. ナショナリズムと帝国主義

ナショナリズムとは、20世紀に行われた最悪の暴力に関わる人間的な概念だ。第二次大戦中、フランス人イエズス会員で、哲学・神学者のガストン・フッサールは、20世紀には三つの偽りの神があったと述べている。すなわち、「理性の神」(リベラリズム)、「階級の神」(コミュニズム)、「民族/国家の神」(ナショナリズム)だ。「私はここで、『ヴェルタンスハウウンゲン』(世俗の諸観念)の名前を挙げている。それらは、世界が信奉する観念であり、今日、私たちの頭上に浮かんで、古代の神々のように私たちの闘いを指図している。これら三つの世界観が、かくも現代人の精神を支配している現実が、現代を特徴づける社会的・歴史的事実であることは、誰もあえて否定しないだろう」

これら三つの観念は、人間存在の全体性を説明することができ、それ以前のいかなるものにも基づかないと主張する点で、「神々」と名付けられる。それらの観念は、その土台にある「ウソ」をあばこうとするものを、片っ端から破壊せずにはいられないという点で、「偽者」だ。これら三つの「神々」を宗教

へと強引に結びつけようとする試みは、偽りの主張を強めるのに役立つだけだ。たとえば、スペインやカタロニアの国家主義的カトリック、アイルランド・クロアチア・ポーランド・アメリカの国家主義的キリスト教、そしてアラブ諸国の一部に見られるイスラム原理主義などがそうだ。

「ナショナリズム」という言葉はあいまいだ。ヒトラーやフランコはナショナリストだし、カタロニア人のチェロ奏者、パブロ・カザルスやインドの平和主義者ガンディーもナショナリストだ。だが、前者と後者の間に共通点はほとんどない。「ナショナリズム」は一面で、ある文化的土壌と結びついた集団的感情である。ある歴史を共有する人々、一定の伝統や共通の言語、集団的メンタリティやシンボルの体系、神話体系を持ち、「一つの民族」であると自覚する人々が持つ、集団的感情だ。このようなナショナリズムには、「特定の民族」「特定の歴史」「特定の土地」「特定の文化」への愛が存在し、抽象的なものは何もない。

他方、「ナショナリズム」は、フッサールによれば、ある国の神格化につながることもある。その時、それに逆らう者は敵対的だと非難され、拒絶され、時に排除される。その時ナショナリズムは、魂を病んだ古代宗教のようになる。そして、人類は三つに分断される。1. ある「国家」の一員、2. その「国家」の敵、3. その国と同盟/敵対している国々の一員。こうしたナショナリズムは神話を利用/悪用する。歴史が神話的であればあるほど、偏屈なナショナリスト魂は燃え上がる。他方、歴史が現実的であればあるだけ、議論の余地が残るため、ナショナリストは失望する。実際、ナショナリストは歴史を神話的なものに変えたがる傾向があり、神話を疑問視するような見直しには、力づくで抵抗する。

この最後のタイプのナショナリズムは、20世紀を通じて何度も暴力を引き起こした。それは時に、支配勢力に属さない集団の中で暴発してきた(北アイルランドのIRA、バスクのETA、コルシカの独立運動、イスラエル建国前のシオニズム)。あるいは、権力者の側によって組織された(スペインのフランコ主義、ドイツのナチズム、イタリアと日本のファシズ

ム、アメリカ帝国主義、フォークランド戦争時のアルゼンチン、建国後のイスラエル)。暴力への道は以下のような段階をたどる。

1. 複雑な歴史的現実と直面した集団が、「民族」「国家」「国民」「土地」「文化」「人種」など、単純で、容易に交換のきく言葉で歴史を語り、単純化しようと試みる。

2. 歴史的現実とは、そうしたカテゴリーの一つ(たとえば「民族」)に沿って読み解かれる。すべてがそのカテゴリーに依拠し、そのカテゴリーに従って解釈される。

3. この枠組みに従うのを拒否する者は、敵と見なされる(「反スペイン的」「反バスク的」「反カタロニア的」「反アメリカ的」...)

4. 敵は消さなければならない。ここから暴力が始まる。暴力は、神聖な「民族」に奉仕するための必要悪として、正当化される。

このナショナリズムにとって最悪の敵とは、敵対する集団ではなく、平和共存が可能と信じて、両極の間に橋渡しをしようとする人たちだ。弁証法によれば、対立する両極は同一だ。一方の存在は、他方の存在を規定し確認するにすぎない。だが、両者の橋渡しは、ナショナリズムのイデオロギーそのものを拒絶し、その哲学全体を問い直すのだ。

ナショナリズムはまた、帝国主義に傾きやすい。ナショナリズムはふつう防御的で、自己正当化に走り、求心的だ。ナショナリズムは民族自決を要求する。確かに、文化的・歴史的に成熟した集団は、自己を統治する権利がある。逆に、ナショナリズムが攻撃的・帝国主義的になることもある。ある民族があまりに強大なため、その民族が生きていくスペースを確保するために、周囲の領土を飲み込んでいかざるをえなくなる。ヒトラーはこのことを、「生活圏」という言葉ではっきり述べている。「ドイツ」「カタロニア諸国」「全バスク国家」「ソビエト連邦」「フランス」「アメリカ」「ユーゴスラヴィア」「スペイン」などは、領土や文化の侵略を正当化する呪文だ。ナショナリズムの拡大は、領土に限らず、社会的な面でも起きる。あるナショナリズムが、反対する集団を、その社会から一掃してしまうのだ。

### 3. 多様な世界は不可能か？

こう見てくると、社会的・文化的多様性は不可能に思われる。イスラムとヒンドゥー、ユダヤ人とパレスチナ人、バスク人とスペイン人、アイルランド人とイギリス人、セルビア人とクロアチア人、クルド人とイラク人、ツチ人とフツ人、フランダース人とフランス語を話す人々、ロシア人とリトアニア人は、共存することができないのか。ナショナリストの友人が、こう語ったことがある。「歴史が証明することだが(!)、二つの言語が一つの社会で共存するのは不可能だ。時間が経てば、一方がもう一方を飲み込んでしまう」。世界のほんの一部しか見て回ったことがないのに、そう断言したのはさておいても、彼はこの間違った前提から、いきなり結論づけた。「だから、もし相手の言葉がまだ私たちの言葉を飲み込んでいなかったら、先に向こうの言葉をやっつけてしまうべきだ」。実際、私の友人はそう努力してきた。

ここで、反対の主張、つまり「多様性は可能だ」という議論を見てみよう。人類は歴史を通じて、文化的・社会的多様性にどっぷり浸かってきた。それは単に、人類がしばしば移住を繰り返してきたからだけでなく、「単一の文化」について語ることは不毛だからでもある。確かに「文化」は人類の一側面として存在するが、いったい私たちは「単一の文化」について語るができるのか？「同一の文化」に属していると言われる人々について、時間をかけて話し合ってみれば、その多様性に圧倒されるはずだ。それこそが、人類の大きな特徴の一つなのだ。

問題は、人々が考えているように「文化的多様性は不可能だ」ということではなく、「アイデンティティの危機」の項で見てきたように、人々にそれを受け入れるよう心を開かせるのが難しいということだ。私は、白人や黒人と、異性愛者や同性愛者と、ユダヤ人やアラブ人と、コルシカ人やフランス人と、キリスト教徒や無神論者と一緒に暮らすことができる。だが、もし私がアイデンティティの危機に陥ったら、安全と保護を確保するために、集団的アイデンティティへと逃げ出すだろう。そして「私はスペイン人だ」と宣言し、あらゆるバスク分離主義者やカタロニア人を嫌悪するだろう。「フランス人」になってブル

ターニュ独立主義者を憎むだろう。「イスラム教徒」になってキリスト教徒を憎むだろう。「アルゼンチン人」になってチリ人を憎むだろう。「労働者」になって、資本家を憎むだろう。「スクォッター(不法占拠者)」になって、体制に属するすべての人を憎むだろう。

あなたはキリスト教徒か、社会主義者か、カタロニア人か、あるいは単に「あなたは何者か」と尋ねられたら、ふだんなら「私は私だ」と答える。だが残念なことに、ありのままの自分を受け入れることが難しい心理状態にあるとき、単純なイデオロギーや集団に同化して「他者」を拒絶し、多様性を不可能と考えて有害な画一性を支持してしまうことになる。議会でさえ、「他者」を疎外する法律を成立させ、合法的な暴力に手を染める。こうした画一性の企ては、しばしば支配政党の手で、他の重要な社会問題を隠すために行われる。支配者たちは、「我が祖国」「我が教会」「我が国民」について語ることで、まさにその架空の「一致した集団」のただ中で、露骨な社会経済的不正が行われている事実を忘れさせようとするのだ。

#### 4. お前は仲間ではない

多様性の拒絶は、社会的排斥へと導く。その実例は枚挙にいとまがない。あまりに度々排斥が行われてきたために、当たり前のようにさえ思われている。社会には、生活を向上させる機会をほとんど持たない集団が数多くいるが、私たちは十分に対処していない。たとえば、ドミニカ共和国のハイチ人、日本で暮らす韓国・朝鮮人、スペインのボスニア人、ドイツのクルド人、アルジェリアのキリスト教徒、米国の黒人、北アイルランドのカトリック教徒、インドのカースト外の人などだ。そこには明確な「社会的境界線」がある。それは目に見えないが、空港の税関よりはるかにリアルだ。私にとって誰が「同胞」かは明らかだ。私たちは互いに助け合う。もし、同胞ではない誰かが助けを求めたら、私たちは言葉にならない言葉で、態度で、こう答える。「お前は私たちの仲間じゃない」。そして、コミュニケーション

はそこで終わる。

これこそが、20世紀の暴力の主な原因だ。体制の「内側」にいる人は社会的境界線を守ろうとし、「外側」にいる人は体制を攻撃する。内側で暮らす人々は、快適で、贅沢といってよい暮らしをしている。彼らは今の暮らしを失うのを恐れている。南アフリカがアパルトヘイト(人種隔離)を行っていた頃、白人たちを団結させていたのはこの恐怖であり、続々と押し寄せる移民の前に、ヨーロッパが感じ始めているのも同じ恐怖だ。体制内に入ろうとする人を押しとどめるために暴力が用いられるが、外側にいる人々も飢餓の恐怖から、障壁を壊そうと暴力をふるい、体制の内側の快適な暮らしを手に入れようとする。

「お前たちは私たちの仲間ではない」。どうしてそんなことが言えるのだろうか。「お前/あなたたち」とは、元々、人間の心が他者に関わっていること、人は愛なしには生きられないこと、愛は他者の存在なしにはあり得ないことを示す言葉だった。「私たち」という言葉は、多様性を一つにまとめるものである。どんな人も全体から排除されず、逆に全体によって可能性を開かれるのだ。本来こんな意味を持つ「私たち」と「あなたたち」が、恥知らずな社会障壁を築くために用いられるのは、悲しいことだ。

#### 5. 家庭と学校の暴力

心理分析家のアドナン・フーバラーは、レバノンで暴力の犠牲者と共に過ごした体験から、内戦には4つの段階があると指摘する。

1. 最初に、独自の社会観や国家の将来像を持つ、イデオロギー同士の衝突がある。彼らは武力に訴えて主張を闘わせる。

2. 時が経つと対立は激化し、もはや単なるイデオロギー同士の対立ではなく、より根本的で生活に密着した、コミュニティ同士の対立に変わる。こうした変化が、エスニック・グループや文化的集団だけでなく、宗教コミュニティ同士の対立にも及ぶとき、政治問題を正当化するために、「宗教的な言説」が利用される。

3. それぞれのコミュニティには複数のリーダーが

共存している。一部のリーダーが戦死すると、残された信奉者は過激化し、亡きリーダーに忠誠を示す必要を感じて、流血の事態に至るまで争う。「これこそ、戦争の中でもっとも悲惨で残虐な段階だ。多くが若者である兵士たちは、かつてないほど残虐な行為を行う。残忍さや無慈悲さこそ、忠誠心のあかしだと信じているのだ」

4. 同じ家族のメンバーが、必ずしも同じ宗教、エスニック・グループや社会集団に属しているとは限らない。たとえば、サラエボでは、セルビア人とクロアチア人、セルビア人とボスニア人の夫婦もたくさんいた。エスニック・グループ同士の対立は、直接に家庭に影響する。これこそ、まさに対立の最終段階だ。レバノンでは、兄弟同士が殺し合う。フーバラーはこんな小話を紹介している。「父親が、足を銃弾で負傷した4人の息子を病院に連れて行った。医者が父親に誰が撃ったのか聞くと、父親は『私が撃ったんです』と答えた。医者がびっくりして訳を聞くと、父親はこう答えた。『先生、聞いてください。二人の息子はX運動に、もう二人はY運動に入っています。ある日、議論しているうちに険悪になって、銃を取って今にも撃ち合いそうになったんです。それで、私が息子たちの足を撃ちました。そんな理由で息子たちを死なせるくらいなら、足が不自由になる方がましですから』」

家庭の中にさえ、社会文化的、政治的対立は起きる。その対立はいつそう残酷だ。家族のきずなを破壊するからだ。暴力的な社会は、家庭のただ中に流血の事態をもたらす。そして、さらに悪いことには、家の外では暴力をふるおうとしない人も、家の中ではたがが外れて、愛する家族に暴力をふるうことがある。ここ数年、夫婦間・家族間での暴力が大幅に増えている。家庭では、愛より争いか優勢になっている。

同じことが、特に米国で、大学や高校で起こっている。米国では憲法に定められた時代錯誤の権利として、銃を手に入れるのがきわめて容易だからだ。米国では、学校で銃撃がおこり、多くの死傷者を出す事件が増えている。個々の犯人が精神的に不安定だったのは言うまでもないが、それ以上に、あ

る重大な社会現象に直面しているようだ。家庭に、そして若い人の間に暴力が蔓延しているのだ。でも、なぜ？

二つの要素を考えなければならない。第一に、社会・文化生活における過度の男性支配だ。過去何世紀にも渡って、男性は公的領域を支配してきた。女性は従属させられ、抗議するすべも持たなかった。女性の秘められた苦痛は、墓の中まで持ちこまれた。だが20世紀になって、特に西洋世界では、女性の解放が著しく進んだ。

これは、多くの男性にとって、必ずしも好ましい事態ではなかった。女性解放を嫌う男性たちは、女性に対して、言葉で男性の権威を押しつけようと、うまくいかなければ、暴力を使ってでも従わせようとした。このように劣等感を抱く男性は、女性への暴力で劣等感を解消する。これが、暴力の大部分を男性が引き起こす理由だ。女性は男性ほど暴力と親しくない。世界中で、女性の刑務所は男性刑務所ほど混み合っていない。確かに、周囲がみな男性という環境で生き延びるために、男性自身よりも攻撃的になる女性もいるが、少数派だ。イギリスの首相、マーガレット・サッチャーは、ここ数十年で、西欧でもっとも非妥協的な政治家の一人だが、まさにそのケースだ。

暴力が、男性や男性の統治する社会と結びついているというのは正しい。暴力は男女不平等の目に見える証拠だ。メンバーの半分以上が自由を制限されている社会は、病んでいる社会だ。女性を排除する社会の、症状の一つが暴力なのだ。男性は、フットボールやボクシングのような、肉体をぶつけ合うスポーツ、アクション映画や暴力映画を好む。暴力的な文化はある意味、若い男が一人前になるための必須条件で、これははるか昔から連続と続いている。

ここから、第二の要素が見えてくる。これまで見てきたように、女性を排除する社会には暴力文化がはびこっている。暴力シーンをテレビで何百時間も見てきた少年は、ある日突然、武器を持って教室に現れ、学生や教師を何十人も平然と殺すだろう。乳離れ以来、少年に与え続けられた暴力的なおも

ちゃは、彼に「誰かを殺せ」「敵を阻止しろ」とそそのかしてきた。現実と想像の世界を区別して、誰も殺さずにやってこれた人がいるからといって、誰もがそうできるわけではない。ついには、想像は現実となり、教室に血が流される。子どもたちが暴力映画を見て、暴力的な心を育むのを許した、その同じ社会が今度は、子どもたちの暴力におびえる。学校で見る映画の中にさえ、暴力映画が紛れ込んでいるのだ。

警戒厳重な刑務所を増やすのは、あまりに愚かな解決策だ。唯一の現実的な解決とは、暴力の種である貧困と社会的不正に真剣に取り組み、誰も排除しない社会を創るよう努め、平和文化を促進して、暴力文化を一掃することだ。たとえば、14歳以下の子どもが、映画やテレビ、テレビゲームで暴力的なシーンを見られないようにするなどの方策をとるべきだ。

## 6. 死を招く宗教

平和のメッセージは宗教的側面を持っている。なぜなら、それは、来世的なものへと開かれた深い信念から生じるからだ。人が自分自身や同じ人間仲間、周囲の自然と調和して生きていくのは、ごく当たり前のことだ。それはいかなる物理法則に属するものでもなく、信仰という特定の世界観から生じる人間学的・道徳的信念だ。宗教は、宇宙論的自然観によって(東洋宗教)、あるいは社会的兄弟愛によって(西洋宗教)、人間生活に平和をもたらしてきた。

だが、宗教教団は、権力に支配される人々を内面的な世界へと閉じこめ、政治家によって道具として利用されてきた。アイルランド人やクロアチア人、ポーランド人やスペイン人は、カトリックを利用してきた。反西洋のアラブ人は、自らの考えに都合のいいように、コーランを利用してきた。シオニストはユダヤ教の教典から都合のいい文句を引用してきた。アメリカ帝国主義者はキリスト教を歪曲し、南米などでセクト(新興宗教)として活動する、自称「福音派」の親米グループを援助してきた。政治に仕え

る宗教は権力の道具、死の道具と化した。宗教に根ざす暴力は、他のどんな暴力よりも残酷だ。宗教は敵への攻撃を神の名の下に正当化し、9.11のような惨事を招くからだ。

宗教はとても危険だ。それは火元というより、火に注がれる油だ。宗教は本来、人間の精神が来世に開かれていること、そして、その開きと信仰によって、人間が神と出会うことを示す、一つの道にすぎない。宗教が政治の道具として用いられることなどあってはならない。

とはいえ、宗教には政治的側面があることも否定できない。宗教は人間に関わるすべてのことに影響を及ぼすからだ。だが、これはきわめて微妙な領域で、解釈の幅が大きい。エル・サルバドルのオスカール・ロメロ大司教と、イエズス会の神学者イグナシオ・エリャクリアは、他の解放神学者と共に、キリスト教の兄弟愛と、公正でより人間的な世界を築きたいという願いに基づいて、さまざまな政治的観念を考え出した。もっと単純な人なら、同じ観念に基づいて、武器を取って戦争を始めるかもしれない。20世紀の大規模な暴力事件のいくつかは、宗教的背景を持っていた。北アイルランドのアイルランド・カトリックとイギリス・プロテスタントの紛争、ユダヤのシオニズム、共産主義の無神論、そして中でも、イスラム原理主義だ。

## 7. 分裂症的な民主主義

民主主義は暴力への防波堤であり、ある集団から他の集団への恣意的な攻撃を防ぐと考えられている。民主主義体制では、すべての市民は法の前に平等であり、誤った暴力は罰せられる。だが、民主主義は分裂症的な性格を持っている。一方で平和主義の顔を持ちながら、他方で戦闘服を着ているのだ。米国が民主主義国でないという疑う人はいるだろうか？ その一方で、第二次大戦後にアジアや南米、イスラエルに生まれた独裁政権を維持するために、アメリカ政府が介入してきたことを、いまだに知らない人はいるだろうか？ 地雷製造を含む、兵器産業のビッグ・ビジネスに、アメリカが介入



してきたことは？ フランスが民主主義国でないと思っている人はいるだろうか？ そして、アフリカを暗黒大陸に変えた内戦の恐怖に、フランスが果たした役割を知らない人は？

民主主義国には、告白しなければならない罪がたくさんある。暴力を引き起こすのは全体主義だけだ、というのはウソだ。民主主義国もまた暴力に加担し、独裁国を公然と支援し、血に飢えた政権に武器を売ってきた。民主主義国の第一の関心は人権ではなく、自国を(自国の一部の人々を)潤す利益のようだ。こうして、私たちは分裂症的な民主主義に生きている。ホラー映画のように、昼はヒューマニスト、夜は血に飢えた殺人鬼だ。私たちはみな、そのことを知っているし、実際に目撃している。にもかかわらず、抗議しているのは、西欧の一部のキリスト教グループやNGO組織だけだ。誰かが、そのことを政治討論会で話そうものなら、権力とマスコミの総力を挙げてつぶされる。

民主主義の大きな危険は、フッサールが『理性、階級、国家』で述べた「自己神格化」だ。民主主義は自己を人間の進歩の最終段階とみなす。民主主義に対するいかなるオルターナティブ(代替案)も、抑圧的、反民主主義的と糾弾される。このような体制の自己神格化は、非難をほとんど受けることなく暴力を遂行することを可能にする。9.11の後、ジョージ・ブッシュ大統領は、いつもの単純な口調でこう述べた。「『国際テロに対する戦い』において、我々と共に戦わない者は、我々に敵対する者だ」。そうして、米国とイギリスは世界中で爆撃を行い、イスラエルのシャロンのような恐るべき政治家を公然と支持し、それを「テロに対する民主主義的な戦い」と称するのだ。反対に、アル・カイダが同じことをすると、単に「テロリズム」で片づけられる。どこが違うというのだ？

## 8. 民族抹殺

抹殺は究極の暴力だ。抹殺は個人としての「他者」を消滅させる。個人としての「他者」は、集団としての「他者」にとけ込む。もはや「アイザック・M」

はいない。そこには「一人のユダヤ人」がいるだけだ。人は言う。「ユダヤ人は誰も同じに見える」。そして、彼らが私に犯したとされる数々の過ちによって、彼らの集団全体が有罪とされる。実際に有罪となる行為があったのか、その可能性があっただけかは問題ではない。集団の全員が、罰を受けなければならない。もし、個人がその集団に属しているという自覚がなくても、一向にかまわない。私が知っていれば、それで十分だ。

ナチス・ドイツ帝国のユダヤ人や、スターリンのソ連、もっと最近では、アルジェリアやラテン・アメリカ諸国で虐殺された人たちは、自分たちが断罪された集団の一員だとは思っていなかった。抹殺は、「全員を消滅させる」ことを目指している。もし、それが無理でも、可能なかぎり痛めつけて、その集団が簡単には回復できないようにする。特に残虐な行為は、もっとも弱い人々 - 女性こども、赤ん坊、老人など、敵対する人々の感性をもっとも刺激する人々に向けられる。ただ殺すだけでなく、痛めつける必要がある - ナチスやセルビア人、ラテン・アメリカの軍事政権が行った、サディスト的な行為がまさにそうだ。

ふつう思われているように、虐殺が熱狂的に行なわれるケース(たとえばインディラ・ガンジー暗殺後に起こった、ヒンドゥー教徒によるシク教徒の虐殺)は、滅多にない。虐殺は、冷静な判断から、たとえば会議によって決められるのだ。

私たちは、虐殺を魂そのものへの攻撃と見なすが、実はそれは、私たちが毎日受け入れている思考パターンの延長に他ならない。私たちは日常生活で、世界を「私の仲間」「私の敵」「どちらでもない人」に分けている。すでに見てきたように、一度、こうした思考パターンを受け入れれば、次には「私の仲間」の繁栄を正当化する論理や、「私の敵」の不利益を正当化する論理がやってくる。

このメンタリティを支えるために、アメリカの映画業界は「正義の味方」と「悪党」の対決を描く映画を、毎年何十本も制作し、それらは全世界で上映される。映画の中では、「悪党」のふるう暴力は許しがたいものとされ、「正義の味方」がふるう暴力は、正当

化どころか大歓迎される。このような、「悪党」を一掃したいという願望こそ、ヒトラーやスターリン、ポル・ポト、レーガン、ミロシェビッチ、カラジッチ、そしてジョージ・ブッシュなどの仲間たちの頭に浮かん

でいた、偏執症的な民族抹殺的精神の根元にあるものだ。

## ・終わりに - 今日見過ごせば、明日は戦争

---

20世紀の暴力は、さまざまな仕方で私たちに襲いかかってきたが、それは同時に、私たちの心に生じたものだ。「襲いかかってきた」というのは、それが「高度に政治的な領域に及ぶからで(たとえば、旧植民地の独立にからむ問題)、私たちはそうした問題に、何の影響も及ぼせないと感じる。それが「私たちの心に生じた」というのは、政治とはしばしば、市民の感じることを実現するものだからである。世界に虐殺があるとすれば、それは私たちが体制内部にいる「匿名の虐殺者」だからだ。もし、そうでないなら、どうして私たちはこんなに多くの暴力映画を消費し、戦争のようなスポーツを支持するのか？ もし、そうでないなら、どうして私たちはしばしば、ある集団にアイデンティティを感じ、その集団の敵を攻撃したり、抹殺したいと望むのか？

過去1世紀の暴力の多くは、以前の忘れられたできごとが招いた結果だ。ある明白な歴史的不正が、「時はすべてを癒す」などというばかげた言い訳で見過ごされたり忘れ去られたりすると、時を経て人々は、暴力によってその不正に復讐しようと企てる。アフリカのグレート・レイク地域で、ツチ人とフツ人の間に植民地後の国境線を引いた、「選ばれた人々」とは誰だ？ ワシントンやロンドン、パリで、地図の上に国境線を勝手に引いたのは誰だ？ 南の諸国の労働者がヨーロッパやアメリカに入国する際は、許可を得なければならないのに、北の諸国の資本と資本家は許可なしで世界中をめぐり、どこにでも入り込めるように決めたのは、どんな優秀な人なのか？ 肌の色に基づいて、人類をさまざまな人種に分けたのは誰だ？ 人々を国籍に従って分けるべきだと決めたのは誰だ？ パスポートを持っていることの方が、一人の人間であることより重要だとでもいうのだろうか？

人類の歴史は忘却や見落とし、不正に満ちている。

だからこそ、「よりよい明日」などという偽りの未来を

口にできるのだ。人類の歴史とは、復讐の連鎖によって、未来の暴力の土壌を豊かにしてきた歴史とあってよい。この本のはじめに書いたように、私は暴力のばかげた性質について、よく知らないし、当惑してもいる。だが、将来、暴力をなくすか、せめて減らすための唯一の方法とは、人類社会の一員であるすべての人の社会的・経済的福利のために積極的に働くこと、そして今日、人類を対立する諸集団に分裂させている暴力文化を克服するために、普遍的な兄弟愛の文化を種まくことだ - という意見に、他の多くの人と同様、賛成する。私はここで「一致」と言わずに「普遍的兄弟愛」と言った。つまり、私は多様性を攻撃するのではなく、むしろ、平和で調和に満ちた、多様性の共存を支持する。私がここで述べていることは、何一つ新しいものではない。実際、人間は最初から、平和に共存するように創られているのだ。少なくとも、私は理性と信仰から、そう信じている。

<注>

1. これから数ページに渡って述べる意見の一部は、最近、私が執筆した『暴力 - 画一性が多様性を飲み込むとき』Razon y Fe (March, 2002), Madrid, 267-268 で既に論じたものだ。いくつかの文章が直接引用されているが、ここでは引用箇所は示さない。
2. 第2回ラテンアメリカ司教会議文書『教会と人間の解放』、メデジン、コロンビア、1968年、第2章、16。邦訳はJ. マシア『バチカンと解放の神学』南窓社、1986年。
3. コンラート・ローレンツ『攻撃』(1.2)、日高敏隆・久保和彦共訳、みすず科学ライブラリー15、1970年。
4. ホッブス『リヴァイアサン』第1巻、水田洋訳、岩波文庫、1954年、199ページ。
5. 同、第2巻、1964年、27ページ
6. 国連開発計画『人間開発報告書 2001』第1章。